


在りし日

谷田達彌

武蔵野書房



在りし日

武蔵野書房

著者略歴

谷田達彌 (たにた たつや)

大正5年、栃木県栃木町に生まれる。

昭和12年、衆議院速記者養成所を卒業、衆議院速記課に勤務。

昭和18年4月、早稲田専門学校法科に入学(19年3月中退)。

昭和54年、衆議院を退職(記録部副部長)。

昭和24年、『文学草紙』同人となり、現在に至る。別に、昭和37年より約10年間、同人誌『風船』を主宰。

著書——小説集『赤い帆前船』(昭和35年)、『うずま川』(昭和57年)、『速記の習い方』(昭和48年)。編著——『衆議院速記者養成所五十年史』(昭和43年)。

在りし日

一九八八年九月一五月初版第一刷発行

著者——谷田達彌

東京都調布市深大寺南町四二二二三
郵便番号 一八二

発行者——福田信夫

発行所——武蔵野書房

東京都国分寺市東恋ヶ窪二一四一三
電話〇四二三一二四一二三九一／郵便番号一八五
振替・東京八一九一二二九

印刷／ミツワ印刷 製本／松栄堂製本
装幀・駒井佑二

不良本は送料小社負担でおとりかえいたします。

© 1988, Tatsuya Tanka

定価二〇〇〇円(送料小社負担)

武蔵野書房の主な文学書

(詳細案内送呈, 送料小社負担, 1988年9月)

保昌正夫著

横光利一全集随伴記

I 横光利一全集随伴記 II 昭和の作家たち III 私の『早稲田文学』 IV ときおりの歌 V わが師わが友 VI 本の話 VII 私

四六判・三六六頁 二二〇〇円

中山和子著

昭和文学の陥穽

——平野謙とその時代——

『近代の超克』と平野謙、「身は売っても藝は売らぬ」考など書きおろしを含む最近の平野謙論一〇編と、葉山嘉樹、平林たい子、佐多稲子論。 帯・本多秋五

四六判・二五四頁 一九〇〇円

岡田孝一著

中野重治——その革命と風土

中野重治を生涯の師と仰ぎ、氏のごとくに生きようと心に決めて戦後の文学と政治の分野にわたる運動に執ってきた著者が中野重治没後七年目に紡ぐ自己確認の書。

四六判・三〇二頁(口絵二頁) 一八〇〇円

米田義一著

伊丹万作

志賀直哉「赤西蠣太」映画化のことなど/ある遺稿と二つの書簡——中野重治と桜田常久に關して——など全一章/付——年譜・作品(映画、文章) 目録・参考文献 四六判・三六六頁(口絵一二頁) 二八〇〇円

平川虎臣著

平川虎臣作品集

第一部 詩・短歌・随筆——一、詩(16編、大正八年) 昭和九年) 二、短歌(93首、大正八年) 昭和三年) 随筆(21編、昭和九年) 四、四年) 第二部 小説(14編、昭和九年) 一八年) 付——一、解題 二、年譜三、あとがきに代えて

〔平川虎臣作品集刊行会編集〕 菊判・三八七頁(口絵四頁) 二九〇〇円

武蔵野書房の主な文学書

(詳細案内送呈, 送料小社負担, 1988年9月)

トルストイ論集

本多秋五著

五〇年にわたるトルストイ論考を全集成。Ⅰ、『戦争と平和』論 Ⅱ、『戦争と平和』について(23編) Ⅲ、『アンナ・カレニナ』『復活』『ハジ・ムラート』『神の国は汝等の衷にあり』等について(24編)

A5判・七〇〇頁(口絵一二頁) 四八〇〇円

北御門二郎著

トルストイとの有縁

トルストイ・瀧川幸辰・河上肇との邂逅／わが誤訳指摘二十年／私のトルストイ個人訳／イエスの法灯を継ぐ者／市房山麓湯山から——解説・沖津正巳

熊日文学賞受賞

A5判・三四四頁(口絵四頁) 二八〇〇円

北御門二郎訳

トルストイ戯曲集

闇の力／文明の産物／生ける屍／光は闇のなかに輝く／酒のはじまり／百害のもと／訳者あとがき 一九一三年発行のビリュコフ版(モスクワ)所収全作品の完訳

A5判・四九〇頁(口絵四頁) 三八〇〇円

村山道子編

望みを託して

——ハルビン学院と

井田父子の生涯——

ロシア語の先覚者として日露協会学校を創設した井田孝平とその妻・須賀子の悲運の道程と、昭和初年代に詩作と革命運動に燃焼・夭折した子息・麟一の生の軌跡。

四六判・五一〇頁(口絵一四頁) 二八〇〇円

武蔵野書房の主な文学書

(詳細案内送呈, 送料小社負担, 1988年9月)

耕 治人自選作品集

耕 治人著

著者の四十余年におよぶ創作活動のなから「風呂桶」「一条の光」「この世に招かれてきた客」など小説二編、「私小説と作者」「捨身」「存在の根元」など感想一編を精選して加筆・訂正し、書きおろし小説一編を加えた重厚本。著作年譜、参考文献を付す。

菊判・四六八頁 三八〇〇円

耕 治人著
耕 治人全詩集

昭和五年〜五十五年

耕 治人著

十九歳から七十四歳までの詩一一四編および詩についての感想三編。自筆年譜、著作年譜、著書目録、参考文献を付す。

帯・本多秋五

A5判・三三六頁(口絵二頁) 三〇〇〇円

ある魂の履歴書

中島和夫著

戦後四〇年間、文芸誌等の編集者生活の中で著者の心に強く刻印して逝った耕治人氏など三人をモデルに描いた標題作ほか「ピンクのハンチング」「悲しみの創作」の書きおろし三編をまとめる。

栗・吉行淳之介

四六判・二二〇頁 一八〇〇円

文学者における

中島和夫著

人間の研究

正宗白鳥、広津和郎、尾崎一雄、中野重治、舟橋聖一、伊藤整、佐多稲子、高群逸枝、中村光夫、山本健吉、平野謙、平林たい子、井上靖、武田泰淳、埴谷雄高、吉行淳之介、遠藤周作ほか。

四六判・三〇一頁 一七〇〇円

在
り
し
日

目次

富士見橋のほとり 五

浅草 一五

同窓会 三一

夏草 一七

チチハル 一九

寒椿 二七

在りし日 三七

3 目 次

かるい手……………	二六九
あとがき……………	二九一
添えがき……………	二九五
保昌正夫……………	二九五

富士見橋のほとり

東京から真北へ約二十里、関東平野が尽きて遠くに日光連山、近くにひくい山なみがせまって見えるひろびろとつづく田園のなかに野州南部の小市栃木がある。

南北一里ほどのほそながくのびた古い静かな町だ。町の南の端に国鉄両毛線と東武電車の駅がある。

私はこの栃木の町のほぼ中央を流れる巴波川うすまのほとりで生まれ、育ち、かぞえ年はたちの春先までこの町にいた。

北から南へむかう青黒い藻草の多い巴波川が町はずれにちかい下河岸の大きな堰を境にして二つにわかれ、その一つのはそい方の流れがやがて町をはなれて野中へもぐりこんでいく手前に小さな橋がある。

富士見橋という。

この長さ十メートルたらずの橋は、いまは堅固な石造りに変わっているが、当時は木橋であった。橋脚や欄干もほそく、古びてうすぐろくよごれていた。

当時というのは、昭和八年の春から十年の二月なかばまでの間のことで、ちょうど私が町の旧制中学を卒業する前後の約二年間をすごしたのがその富士見橋のたもとにあった家であった。

そこは下河岸よりもさらに南のはずれだったが、駅には近かったから朝夕通学の生徒たちが橋をわたり家のまえを通った。広い田んぼの中に新開のまっすぐな砂利道ができてから、それが近道なので女学校と商業学校へかよう生徒が通るのだった。学校はずっと先の太平街道にあった。

朝夕のひとつときをのぞけば、そのあたりは家数がすくなく畑や空地の多い細い道ばたにぼつりぼつり住宅が見えるくらいだったから寂しく森閑としていた。

富士見橋の上に立つと、南のほうにひろびろとつづく田畑のむこうに両毛線の汽車のとおり低い土手と鉄柱がずつと山裾までのびているのが見え、また西方一里の太平山のややとがった杉の峯、それからその峯の頂きから岩舟山のほうへなだらかにくだってゆく稜線のぎざぎざまではっきりのぞまれた。離れては山裾に点々とかすむ農家の森が、近くには権現さまのこんもりと繁った大きな杉森も見えた。そして晴れた日の夕暮れどきにはあざやかに染まったあかね色の遠い西南の空にちいさな三角形の黒い富士が絵のように見えることもあった。

町中の繁華街に近い川べりにあった家から下河岸のはずれのそんな寂しい所に移ってきたのは私が中学の五年生に進むころであった。

天保年間から続いてきた本家は江戸時代から明治の初年までは巴波川のいわゆる船積問屋だったようであるが、明治十年代から味噌醸造を本業としてかなり盛んに商売をつづけてきたのであった。その本家が、昭和初年の伯父の急死と、経済恐慌の余波なども禍いして破産し、川べりの土地と邸をあげ渡して逃れるように隣のK市へ去って行ったあと、分家である私の家では病身の父にかわって気丈な母が新たに文照堂という書店を開業し、数年間なんとか切り盛りしてきたのであったが、不景気のさ中でしだいにジリ貧となり、本屋の店もついに他人に渡して富士見橋のほとりに移ってきて文房具と雑貨、煙草を売る小さな店をひらいたのであった。

家族はこのとき、五人、うちにいた。父と母と兄の啓三と私と妹の千恵だ。

長兄の武と次兄の重吉はうちにいなかった。

長兄の武は、私より九つ年上で、東京で気ままな一人暮らしをしているらしく、私はめったにこの長兄の顔をそのころ見ることがなかった。

次兄の重吉は、不景気のため内地で就職することができなかったので、大連市（現在の旅^{リュウタイ}大）に在住する父の旧友をたよって渡満し、数年を送り、帰ってきて東京蒲田の会社にそのころはまだ入社したばかりで下宿住いをしていた。

こういう状態であったから私たち七人の家族が顔をそろえることはほとんどなかった。

家族のほかには、ウメという十六になるすが目の少女がいた。背の低い、すこし猫背の、肥った子で、金太郎みたいにまるい顔をしている。ころころとよくはたらいた。本屋の頃近くの在方から台所の手伝いに来て住み込んでいたのが富士見橋に移ってからもつづいていたのであった。

ウメは私の母が面倒見がいいせいとか、よくなついていた。貧しい小作農家に育ったウメは、妹の千恵とおなじ浴衣を母にこしらえてもらおうと、顔をあかくしてよろこんだ。

「ウメちゃん、このごろ少し色が白くなってきたぞ」

私はウメをときどき、からかった。

「この不良」

母のいる前でもかまわず、ウメはすが目で私をにらみつける。それでも笑っているのだ。ひどい

すが目なので、怒っているのか笑っているのか、よくわからない。そんなウメが私にはおもしろく、少し可愛らしかった。

「うちへ帰りがたらないんだから困っちゃう。小さいのに苦勞してきたんだねえ」

母は早晚帰さなければならぬウメをふびんがっていた。ウメは字もあまり書けなかった。小学校へもろくに行けなかったからだ。在方には継母と血のつながらない小さな弟妹がいた。

下河岸には十二、三軒娼家があった。富士見橋から一つ上の橋の所で、横丁に入ると、両側に同じ造りの表に小門や格子窓のついた二階建の家がならんでいた。

日暮れどきになると、その川べりの柳の下あたりに白首の派手な着物をきた女が立ちはじめ、通りかかる男に声をかける。

夜は私などその横通りへ入れなかったが、昼間そこをそっと通り抜けてみたことがある。両側にひと並びの古い造りの娼家があるだけで、裏は野菜畑や空地がひろがり、急ごしらえの砂利道が一本畑のほうへのびてい、道ばたの外灯のそばに新築の小料理屋らしい家が建ちかかっていた。私は深夜、部屋の窓から見える悩ましがちな灯りの場所が昼の光りの中ではこんな寂しいものかとおもった。同じ道を帰りに通ってみたら、薄暗い娼家の土間の中から声をかけられ、ドキッとした。年上の女の化粧のない顔は黄ばんで、病人のように見えた。

この下河岸で娼家を妾に持たせているという老人がその頃ときおり顔を見せて、父と何か話し込

んでいることがあった。

戸沢というその老人は馬喰上りの金貸だとのことで、横柄な態度を露骨に見せた。大男で目つきが鋭く、禿げ頭が光っていた。しかも話によると、カボだという。父がそんな戸沢老人と懇意そうに話しているのが私には不愉快だった。

父は隣家の奥座敷に病いの床を敷きはなしにして寝たり起きたりしていた。

隣家というのは、文房具煙草雑貨などならべた角店のトタン屋根の狭い平屋とは別棟の、裏だけが渡り廊下で続いている瓦ぶきの二階家であった。そこは踏石や庭木や小さな石灯籠もある庭の隅のほうに花壇と兎小屋などもあった。ヒバ垣に裏木戸がついていた。

戸沢老人はその木戸口から黙って大きな身体でいかにもぬっといった感じで庭に入ってくる。そして父の病室にしている座敷の廊下へ黙って上り込むのだった。

私は父に向って直接言うことはできなかつたが、母には言えた。

「なぜあんな奴がうちへ来るんだ」

「いろいろなわけがあるんだから……もう少し辛抱してちょうだい。おとうさんもたいへんなんだから」母の辛そうな説明によると、借金というのは、戸沢老人から直接借りたのではなく或る旧知の金融業者から借りたものが回されているらしい。その旧知の金融業者というのは以前父が世話をした人だったが、返済される用途が立たぬと見てとった手段だった。

母は私などに詳しい説明をしたのではなかつたが、日ごろ耳に入る片言から想像はできたのであ

る。

本家の倒産に関係のあったその金融業者は遠い姻戚の立場にあつたので、かえっていけなかつた。昔は昔、今は今であつた。

私はその人の顔を浮かべた。おとなしそうな、腰の低い人だつた。父の悲哀が思いやられた。

本家の倒産が残した影響は思いがけぬところからあらわれたりした。

父がどれほどに病弱に耐えつつ心をいたためてみても、回復できる望みはもうないのだった。早晩なんとかしなければならぬときが迫っていた。

夏祭りの近づいた夜だつた。

私は隣家に住む田崎英子と肩をよせて川べりの近くを歩いてた。二人とも浴衣がけた。下河岸一帯は下流にくるほど螢が多く、草の生い茂つた道を踏んでいくと、あたりは乱れとぶ螢の灯りがうるさいほどだつた。

英子は女学校の四年生だつた。大柄で、色は黒いほうだが目鼻立ちがちょっと日本人ばなれしてゐた。胸のあたりがもう大きくふくらんでいた。受験勉強中で、英語の好きな私に相談にくることがあつた。明るい開放的な性質らしかつた。学校でテニスの選手をしてゐた。

「こないだはごめんなさい。わたしが誘つたのに、あなたまで叱られちゃつて」
「うっかり一緒にいるとまた怒られるかもしれないな」